

「失うことの重要性」

～～幸せとは感じるもの～～

神々が人々に幸せにするために、天界から降りてきました。失明した人は神に「私は愛する家族の顔も綺麗な夕日も見たことがありません」と訴えました。神が彼に視力を与えると、彼は幸せになりました。

「私は凍土の上でも炎天下でも労働を厭いませんが、働くための土地は洪水に流されました」と訴えた農民には神は農地を与えました。農民は幸せになりました。

貧乏な青年がやってきて言いました。「神様、私にはお金がなく家族も持てません」と。

神は彼にお金と美しい妻と、可愛い子供を与えましたが、青年は暗い顔で「神様、私には才能もありません」とさらに訴えました。すると神は彼に才能も与えました。

数日後、青年はまたやってきてとうとう言いました。

「神様、私には幸せがありません。下さい」と。

神は少々躊躇された後、「与えよう」と言って、これまでに与えたすべてものを取り除きました。

その結果、青年は一人ぼっちのホームレスになり、飢餓と悲しみと孤独に暮れる日々を送ることになりました。二年後、神は青年に家族だけを返しました。

すると青年は「私は幸せだ！」と号泣しながら妻と子供を抱き締めました。

失って幸福を得る

小さい頃、大人からこの言い伝えを聞いた時は、単純に青年の貪欲さに憤慨を覚えました。

しかし、今は考えが変わりました。彼は失うことを経験していないから、幸せになれなかったのです。

事故や重病から生還した人の話を聞くと、明確な共通点を感じます。それは生への喜びです。

ただ生きているだけで、幸せなのです。生きていること自体が感謝すべき出来事なのです。

些細なことで自殺する今日の日本には、十分に幸せなはずなのに幸せになれない人々が大勢います。理由は簡単です。失う経験がないからです。

得ることは当然であり、足りないことを不幸と考えるのです。その足りないことは、他人との比較であり、足りないことを不幸と考えるのです。その足りないことは、他人との比較によって常に作り出しているのです。だから常に不幸なのです。

これだけ快適な社会に進化してきたのに、自殺者がかえって増えたのは政治や教育のせいだという論調がありますが、僕はこれに同調できません。外部にどんな素晴らしい環境があっても、人の内側に幸せな心を与えることはできません。

「幸せを与える」という表現があるものの、その言葉の本来の意味は、幸せを感じる力のある人に対して、その条件を与えるという意味です。

幸せ自体は本人の心で感じ取り、そして解釈するものです。

<コメント>

この文章は横浜の小林住宅でもらいました。宋文洲氏のメルマガ(6月21日)のようです。

「いいですね！」私も心に残っている文章でしたから、皆さんにもご紹介します。

2年前に上杉鷹山公の史跡探究に米沢に行った時に、お寺にこんな看板がありました。

とっても印象に残っており、携帯の写真に残っています。

「地獄とはどこかにあるのではない。自分が作って自分が墮ちるところ」

時々戒めています。